

をしておりますが、建物の構造や法で定められている職員配置数では、お一人おひとりのご希望にはなかなか応えることができません。二人部屋であること、トイレの数が少ないこと、日中活動の部屋が定員の50名分を確保できず完全な職住分離には至っていないこと、夜間に職員不在のフロアーがあること…等々。これらの問題は、施設だけでは解決することはできません。資金力も必要になります。

このように課題は山積みですが、私たち職員は、それに立ち向かう気力を失ってはいません。これからも、入所施設の実態を会員の皆様にお伝えし、少しでも早く改善策を見つけて行きたいと考えております。どうか皆様にも、入所施設の問題を育成会活動の大きな柱の一つとして取り組んでいただき、安心して子供のたちの将来を託せるシステムを作り上げてまいりましょう。

福島第二育成園で仕事を始めるにあたって

福島第二育成園
園長 藤原勇治

4月1日付けで、支援センター(通勤寮)から、福島第二育成園へ転属することになりました。皆さん、よろしくお祈りします。最初の職員会議で、職員の皆さんとお話をして、非常に誠実に、熱心に利用者支援について考えることができる職員集団と、これから一緒に仕事ができることについて、私自身大きな期待で胸を膨らませています。

さて、施設の今後の課題として、福島第一育成園とともに、新体系事業への移行について進めていかなければなりません。前任の伊藤園長をはじめ、歴代の施設長がこれまでに目指してこられた方向性をさらに発展させる形で、今後の事業についてより良い選択ができるように努力したいと考えています。

海老江工舎周辺のエリアには、24時間支援体制の入所施設機能のほか、地域での暮らしの場としてのケアホームが複数、相談支援事業、居宅・移動支援事業等多くの事業があります。地域で安心して暮らすために必要な機能の多くがそろっています。これらの機能を生かさない手はありません。さらに有効に活用して、誰もが地域の中でより自分らしく、安心して暮らせるような仕組みを考え、創り出していきたいと思っております。その実現のために、果たすべき役割はきちんと果たすこと、地域の方に正しく施設や施設の持つ役割をご理解いただくことなどが必

要です。私たちは、保護者の方々、育成会の会員の皆さまとともに知恵を出し合い、汗を流し、福島第一・第二育成園をさらに信頼していただけるような施設にしていきます。そして、その活動が、海老江工舎の周辺地域の街を耕し、誰もが安心して暮らせる街づくりにも貢献していけるよう、福島第一育成園の角森園長・職員の皆さんとも一丸になって、努力していきたいと思っております。

平成22年4月より、“ワークスいけじま”が就労継続支援B型に移行しました。

新体系に移行するにあたって

ワークスいけじま
主任 杉原 浩司

ワークスいけじまは港区池島にある育成会の中で一番小さい施設です。そのいけじまが、この4月に旧法授産施設(港第二育成園分場)から新体系の就労継続支援B型の事業所に、他の施設に先駆けて移行しました。

これに伴い定員も15名から20名に増え、今後は施設外の作業にも取り組んでいく予定です。

いけじまは、一旦企業就労したものの、年齢的・体力的な理由から離職した人の「それでも働きたい」という声に応えるため、平成9年11月に港第二育成園の分場として開設しました。

そんな施設の特性から利用者の年齢層は他の施設に比べて高いです。現在は37歳から60歳までの利用者が通っておられ、平均年齢は47歳です。

企業就労経験者ということで軽度の方が多く、いけじまに通うにあたって療育手帳を初めて取得された方もおられます。

しかし、本人にも自覚が薄い障害から長年それぞれの職場で苦勞してこられた方が多く、いけじまに来てやっと友達ができたとおっしゃる利用者が殆どです。入所当初は人が苦手で、上手く人間関係を結べない方が多いのですが、慣れるに従い皆さん本当に楽しそうに通ってこられます。最近は休日のたびに利用者同士で遊びに行く方も増えています。

そんな彼らの居場所として、安定して通っていただくために、ワークスいけじまは他の施設に先駆けて新法の事業所に移行しました。

利用者の年齢層が高いということは保護者の年齢も高いということです。よく「親なき後の生活」について話題になりますが、いけじまでは目の前の切実な問題です。